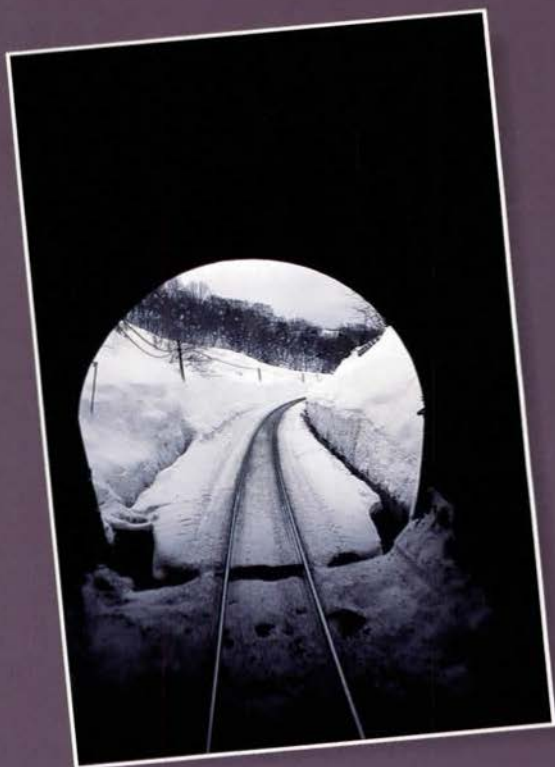


# 浄土

monthly  
JODO

1998 December

12



# テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ  
**日本テレコム**

お申し込み、お問い合わせは  
お客様センターへどうぞ



**0088-82** (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

寺院紀行

奈良

# 當麻寺奥院



當麻寺奥院の本尊、法華土人菩薩



正面が當麻寺奥院本堂、右が阿弥陀堂



當麻寺奥院の境内から眺める當麻寺の東西両塔

奈良  
當麻寺奥



當麻寺奥院を開山した知恩院第十二世の誓阿上人



當麻寺境内に立つ  
中将姫の銅像



宝物館正面に展示してある  
當麻曼陀羅(右)と中将姫絵伝



日本最古の国道であり當麻寺の入り口だった竹内街道

今年重要文化財の指定を受けた『選択本願念仏集』。住生院本とも呼ばれる



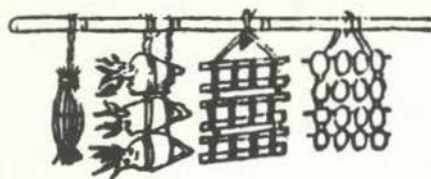
當麻寺奥院六十三世 川中光教住職。中庭にて

撮影・タカオカ邦彦

# 浄土

1998/12月号 目次

|                     |           |    |
|---------------------|-----------|----|
| カラーグラビア 寺院紀行「當麻寺奥院」 | 写真=タカオカ邦彦 | 3  |
| ファインダーの中の仏教         | 藤田庄市      | 8  |
| 連載 民間の伝統芸能と宗教 ②     | 川元祥一      | 18 |
| 寺院紀行 奈良「當麻寺奥院」      | 真山 剛      | 24 |
| 表紙は語る               | 川井 聡      | 33 |
| 連載 無明抄 最終回          | 秦 恒平      | 34 |
| コラム 仏教歳時記           |           | 41 |
| 連載 身障者から学ぶ 最終回      | 高木悦男      | 42 |
| 連載 選択集を拝む(六) 最終回    | 須藤隆仙      | 48 |
| 御法語に聴く              | 袖山栄輝      | 56 |
| Jフォーラム              |           | 61 |
| 事務局便り               |           | 69 |
| 編集後記                |           | 70 |



表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下  
 表紙撮影=川井 聡  
 アートディレクション=近藤十四郎  
 協力=迦陵頻伽舎

ファインダー  
の中の  
仏教

たえず  
変貌する  
異国の  
神  
仏教  
(下)

写真と文

藤田庄市

(フォト・ジャーナリスト)

仏教は異国の神ゆえに、時代と状況に合わせて変身していかねば日本で生き続けることができない。そのことを、現代を舞台として先月号より四つの指標をあげて述べてきた。くり返すと、

①総論的にいえば、仏教は異国の神ゆえに、現代においても生き延びるべくたえず時代適応と日本化を図っている。(先月号)

②仏教が日本化した姿のうち、最も頼りにされた働きは供養であり、現代でもその「供養力」は衰えを知らない。

③伝統仏教の大枠は檀家制度の上に乗っているので、仏教が個人の宗教であると世間はあまり感じていない。とはいえ、釈迦が個の悟りをめざしただけあって、本質が個人の宗教であることを持続し、現代的な形で個の悟り、個の安心あんじんを人々にもたらそうとする。

④このことは必然的に民族の壁を取り払い、現実にはアジアをはじめ世界に仲間がいるので日本仏教も現代におけるインタナショナルの色を濃くしている。(先月号の稿と順序は異なる)

話をすすめよう。

仏教の「供養力」は現代においても新たに力を発揮し続ける。その代表は水子供養だ。先祖供養と並ぶくらい水子供養はポピュラーになった。が、中絶児を対象とする「現代水



鎌倉・長谷寺 水子地藏

子供養」の歴史はたかだか三〇年弱である。埼玉県秩父郡小鹿野町に水子供養専門の新興寺院が、「水子霊の祟り」をひっさげて登場したのが最初である。女性週刊誌などの報道ともタイアップして水子供養は伝統仏教界へも瞬く間に広がっていったことは、今さら説明するまでもない。七〇年代前半の雑誌をみると水子供養をやる神社も紹介されているが、神社での水子供養は広がらなかった。神社側の対応もあるだろうが、基本的には日本人は神社に「供養力」をさして認めていないのである。厄年のお祓いが、神社でこころいへばどの間に定着したのとは好対象だ。その点、神社の「お祓い力」については信頼は絶大である。

仏教の「供養力」を逆説的に証明するエピソードとして、増上寺の元来は子育て地藏であつたものが参詣人によって強引に水子地藏化させられたり、浄土真宗が檀信徒からの水子供養の要請を断るのに辟易している、ということがあつた。一方で大々的に水子供養を喧伝した寺院も、もちろん多かったのだが。

現代仏教の供養の風景はさらに多岐にわたって観察することができる。そのひとつが高野山奥之院や比叡山延暦寺霊園に、七〇年代以降、続々と建立された企業の物故従業員の供養塔である。嚆矢となる松下電器では松下家の墓所内に物故社員の供養塔が共に立てられている。しかし、七〇年代以降の企業供養塔は社員用独自のものがデザインを凝らした

りして建てられた。これも仏教の「供養力」のなせるわざだろう。

「供養力」は人間以外にも及ぶ。ペットだ。ペット供養のルーツは東京・両国の回向院であるように、初期のペット霊園は寺院ないし仏教的装いをとるものが多かった。それが最近では西洋式やビル内のロッカー式というように多様化し、仏教から離れる傾向もあるがそこは「人間でない」という気楽さがあるからだろう。

東京・上野の不忍池の弁天堂に行ってみよう。ここでも人間以外への現代仏教の「供養力」を見ることができる。ふぐ供養碑、スッポン感謝の塔などは、それらを扱う業界団体が建立したものだ。ところが、そうした供養塔とともに、めがね碑、暦塚（カレンダーの塚）、包丁塚といった無生物の供養碑までがならんでいる。増上寺にはハサミを供養する「聖鋏観音」がある。現代人にひそむアニミズム的感性とも相まって、仏教の「供養力」は業界団体という現代の組織を通じて無生物にすら及んでいるのである。

仏教が日本に伝わった時、国家仏教レベルとは別に仏教を受け入れていったのは、死者とかかわるグループであったという説がある。そういえば火葬という葬法の革新を行ったのも仏教だった。伝来以来、仏教は死者供養と結びつき、時代の要請を受け入れると同時に、指導力を発揮しながら自らをも時代と場所（日本）に合うよう変容させてきた。水子供養をはじめ現代の諸供養でも、仏教はみごとに適応して生きる道を付けたのである。



高野山奥之院 企業の物故者供養塔

日本仏教が「供養力を發揮して国家と結びつき作りあげた最大究極の体制が檀家制度であり、この制度のために伝統仏教は個人でなく家の宗教となってしまった。しかし、冒頭に記したように、仏教の本質は個人の悟りにある。だから、戦後の真宗大谷派が「家の宗教から個人の信仰へ」のスローガンを掲げ運動を展開し、他教団もその影響を受けるといふ状況も起きたのである。

個の解脱、個の悟り、あるいは個の安心、個の救いへの仏教の働きは、現代の檀家制度のもとでもさまざまに実践がなされている。それらについては言及しない。ここではひとつだけあげる。

京都市の鴨川のほとりに「弥光庵」というスナックがある。そこを紹介した新聞の見出しは「洋酒びんに数珠かけ つまみは精進料理風 尼僧経営のバーに人気」となる。だが、である。経営者の釈弥光さん（真宗大谷派）によれば、このスナックは寺であるという。なるほど店の入口には『歎異抄』の一節が表装して掛けてあり、洋酒棚の最上には小さいながら阿弥陀仏も安置してある。そして弥光さんが庵を開いた目的は、人々の悩みを聞き、だれもが自然体で自分の生き方を見つめることができるよう助言することだという。つまり弥光庵はスナック形式の寺なのである。

有髪とはいえ尼僧経営のスナックと聞くとキワモノ的な印象を受ける。しかし、個の悟

り、個の救済を本質とする仏教は、現代日本にこうした宗教施設まで生み出したのである。が、つき放してみれば五戒もなにもあったものではない。上座部仏教はもちろん、同じ大乘仏教圏の国々の出家者にとっては驚天動地の行為であらう。

神社にはこうした個の救いへの働きかけは、本質的でないといえる。今年三月に出された神社本庁の「神社基本問題研究会報告書」でも「神社の個人信仰の位置付け」について、神社の公共性は「神社信仰の本質に由来する」とあらためて指摘している。福岡県のハマ信仰行事の神懸りがこの神社の公共性をよく示している。神の託宣はまず第一に、村の翌年の作柄や災害について語られ、個人的な悩みへの回答は儀礼外という感じであった。

最後に現代日本仏教のインタナショナル性について記そう。

アジアの同じ仏教同士の交流は近年とみに盛んである。そのなかで上座部仏教国から仏舎利や仏弟子の舎利を贈られることが多い。するとその安置場所が問題となってくる。「福岡県久留米市の成田山」に昨年落慶したブツダガヤの大塔を模したそれや、福岡県篠栗町の南蔵院の大涅槃仏は、仏舎利の安置所として建立されたものであり、東京都中野区の慈眼寺の金色に輝くタイ式仏塔も住職がタイの寺からいただいた仏塔を納めたものだ。その縁で慈眼寺では、滞日タイ人と日本人らによってソククラン（タイの正月行事）が催される。こうした塔や仏像の建立、および国際交流の催しによって、現代の伝統仏教は自らを再活性させているのである。

海外に向けては、布教では禅が広がっていったこと、また国際援助ボランティアの動き



東京中野・慈眼寺 ソンクラーンにて

のあることを指摘するにとどめよう。

戦前、海外には神社が数多く創建されたものの、敗戦によって瞬時に壊滅した。ここには神社のナショナルリズムの枠をこえられない宿命がよく出ている。

しかし、日本国内に限って言えば神社がなくなることはない。古代の「〇〇廃寺」ということはあっても「〇〇廃社」というのを聞いたことがない。明治時代の国家権力による強引な神社整理・合祀がなされても旧に復した例は多い。神社の土地及び共同体との不可分性がそうさせるのであろう。

以上、現代の伝統仏教に焦点をあてながら、したたかに生きる異国の神・仏教を見てきたつもりである。これまで意図的に僧侶の動きについては言及しなかった。が、結論めいたことをいえば、生き延びさせるのは、じつは僧侶の才覚、能力なのである。僧侶が智慧をはたらかせ活動しなければ、仏教は衰微してゆくばかりであらう。

(了)

民間の  
芸能と宗教  
伝統芸能宗  
②

連載

予祝から生れた  
芸能と神観念

伝統芸能研究・千町の会代表作家

川元祥一

「予祝」という言葉はもう死語になっているのだろうか。いや、寺や神社に關係をもつて生活している人には今でもこの言葉は生きたものかも知れない。

寺の關係では修正会とか延年と呼ばれる初春の行事がそれにあたる。神社關係ではさまざまな呼び方があるものの「田遊」「御田植神事」「若水祭」などだ。「予祝」とは書いて字のごとく「あらかじめ前もつて祝う」というものであるが、何を祝うかというと、人生にとつて有益なもののすべてにわたつて豊かさや安全を祈願する、とてもいえる。しかも「有益なもの」のなかで最も多く盛んに祈願されるものは農業、なかでも米作り、それから山での狩獵、あるいは海での漁業などだ。つまり食糧の豊かさとそのための労働の安全が祈願されることが多い。

このような食糧の豊かさや安全への祈願は世界中にあり、非常に古くから行なわれていた。日本では弥生時代の銅鐸の絵模様<sup>が</sup>稲作の予

祝<sup>だ</sup>とする意見がある。しかもこのような予祝に一定の法則があることがわかつている。「類感呪術」といわれるものだ。

ここに再び呪術が出てきた。そのため再び仏教との關係が問われるのであるが、これは後にして「類感呪術」に少しふれておく。日本人に親しい言葉でいうと「類は共をよぶ」に等しい。わかりやすくいうと「自分たちで望む事柄を前もつて模範的に演じると望みが実現する」といふべきか。

この法則を米作りにあてはめるとよくわかる。米の豊作と労働の安全は誰れもが望むことだ。そこでその望みを実現するために一年かけて行う米作りの労働を正月に前もつて模範的に演技する。これが「田遊」とか「田祭」と呼ばれる予祝儀礼なのだ。漁業だと鯛を釣つてニッコリする「エビス様」だ。狩獵では東北地方に多い「鹿踊」<sup>が</sup>そう<sup>だ</sup>。その他「春田打」「えんぶり」などが豊作業の一部分を演じるようになったものだ。

現代各地で行なわれる予祝儀礼や神事は様々な形をもち、意味をもっているが原形はこのような生産の現場から生れた祈願なのだ。このような予祝儀礼を寺で行う時「修正会」とか「修二会」という。

ところで、呪術としての予祝をなぜ寺で行うのだろうか。この初めは東大寺二月堂で行なわれる「お水取り」らしい。二月に行なわれるので「修二会」ともいう。八世紀に東大寺が建立されてすぐ始まったらしいが、これは本来十一面観音に向って行なわれる仏教行法なのだ。とはいえ同時に行う「お水取り」は「若水祭」であり、この水をいただければ諸病諸厄の四散とか、松明の火粉を頭にいただくと無病息災といった呪術的信仰がある。

仏教と呪術の習合が見えるのであるが、その理由の説明は諸説あるものの、私が面白いと思うのは次のようなものだ。十一面観音に向って仏徒の悔過行法が行なわれる。これはいわば過去の問題だ。この行法に予祝の意

味が加わったのは、悔過行法のまわりで農耕儀礼としての「若水取り」などが行なわれたからだという。今は目立たないが平安時代などの「お水取り」には農作物などがたくさん並べられていたというのである。

なぜ十一面観音への悔過行法に農耕儀礼が加わったのか私にはわからない。勝手な推測をするなら東大寺が全国の国分寺の本山として国家的・地域的安寧を祈願するには仏教的行事だけでは説得力がなくて、各地で先行していた労働現場の予祝儀礼を取り入れたのでなかろうか。それともっと違った理由があったのか。

ともあれ、このようにして仏教と呪術が習合した。今も各地の寺で行なわれる呪術的信仰にもとづく「修正会」はこのような歴史をもつ。鎌倉時代に興った新興仏教の宗祖たちはそれぞれの形でここにある呪術性と仏教の違いを明らかにし、呪術を克服しようとした。聖徳太子の闘いを第一の宗教革命とするなら

## 第二の宗教革命だ。

このような流れのなかで私は最近呪術的な予祝に関心をもって全国各地を歩いている。現代いわれるところの被差別部落の人々が、江戸時代から正月の予祝芸を演じることが多かったからだ。多かったというよりは、三河万歳など一部のものをのぞくとそれは当時賤民の稼業とか役割と考えられていた。

江戸時代の被差別者が行なった正月の予祝芸を門付芸ともいう。太平洋戦争前後まで行なわれた。万歳、獅子舞、大黒舞、エビス舞、鳥追、春駒など多彩であるが、この中で農耕儀礼に關係する「鳥追」を考えてみよう。

農耕儀礼の「田遊」「田祭」は農民が一年かけて田で行う農作業の全過程を前もって模擬的に演じる。「田起」「田植」「鳥追」「獣追」「稲刈」「俵づめ」などだ。その時農民は自分たちの田を対象として、自分たちのために演じるから、それは外部の者に関係ないし、演技が外へ出ることはない。本来農村の広場などで

行なわれたが、東大寺・国分寺に取入れられることによって、大きな寺社などでも行われる。しかし「田起」だけとか「鳥追」だけ「田植」だけと細分化された。東北の「えんぶり」は「田起」の一種だ。

このような農耕儀礼の一部を農村から都市へ持ち出した人がいる。何かの理由で農村を離れた人々だ。中世ではこのような人を非定着者として賤民とか非人と呼んだ。同時にホカイビトとか乞食こじきとも呼んだ。仏教的な乞食でもあるが、多くは旅芸人である。このような旅芸人によって農耕儀礼の一部が都市において正月の予祝芸＝門付芸になる。「えんぶり」をはじめ「鳥追」「春田打」（田起し）「俵ころがし」などだ。

以上見てきたとおり、旅芸人によって各地の門先で演じられた正月の予祝芸＝門付芸は本来農耕儀礼から生れ、農耕儀礼と同じ形態と同じ意味をもっている。ということは各地の寺で行なわれる正月の「修正会」も、その

本来の形は門付芸と同じ形と質をもっていたといえる。  
ところがこの中で旅芸人だけが差別された。



川端康成の『伊豆の踊子』で描かれる踊子は門付芸をする旅芸人だ。彼女たちの行方に「乞食・旅芸人この村に入るべからず」という立看板があったことが描かれ、差別の構図を見せている。同じ芸をしながらなぜ旅芸人だけが差別されるのだろうか。江戸時代からの身分差別の名残といえばそれまでであるが、現代その身分が廃止された時、古い身分制にばかりこだわるのでなく、発想を少しかえて、芸の共通性とその個性をそれぞれ評価するようになったらどうだろうか。

私が労働の現場から生れた呪術的信仰に関心を寄せる理由はもうひとつある。農耕儀礼で農作物の豊さや労働の安全を祈願するのであるが、それは誰れに向って祈願するかということだ。

その祈願はほかでもない。田や土、あるいは山や海にいたると思われた神に向って行なわれる。これはシャーマニズム以前のアニミズムの神観念なのであるが、祈願の形としての

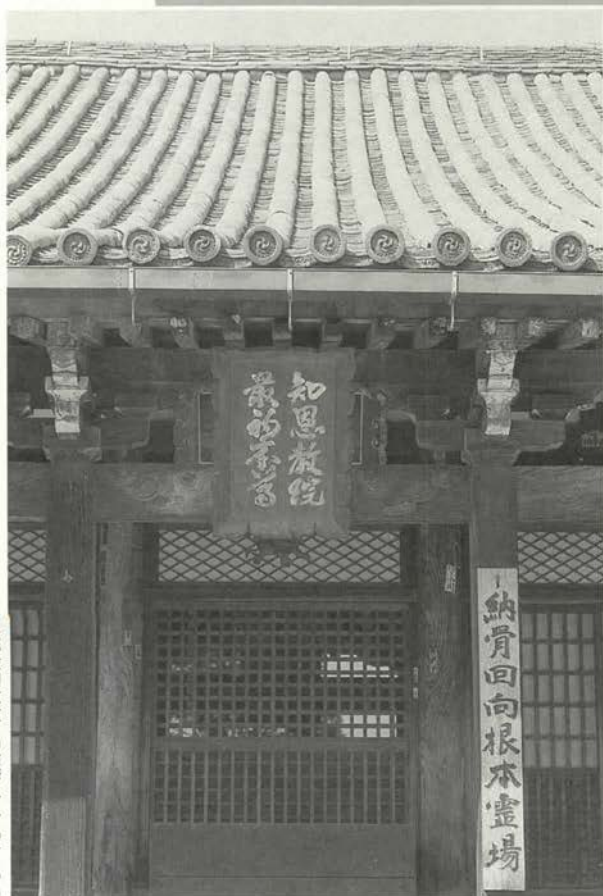
労働の模擬演技がそのことをよく示す。たとえばこうだ。苗代に粃を撒くのは人間の労働である。しかし土に撒いた粃から青い芽が出て、やがて人間の食糧としての米を实らせるのは人間の労働や行為を越えている。これを土の中の神の所業と考えたのである。

漁業や狩猟の予祝も同じ神観念をもって行なわれる。これまでこのような呪術的観念は古くて遅れた観念と見られたが、最近の文化人類学ではキリスト教の神や仏教の仏は、シャーマニズム（天皇制など）以前のアニミズムに関連するのではないかと考えられている。つまりこうだ。アニミズムは自然の生命力を神としている。この神観念がシャーマニズムを通ったあとの普遍的宗教としての仏教やキリスト教に影響を与えている。だとするならば底流にそれぞれの神や仏の自覚に一節の関連がありそうなのだがどうだろうか。

# 寺院紀行

奈良

## 當麻寺 奥院



文／真山剛  
撮影／夕力才力邦彦

本堂正面には「知恩教院最初本尊」の額がかかっている

「浄土宗総本山知恩院の奥の院として『往生院』という名前で當麻寺の境内の奥に建立されました。時に応安三（一三七〇）年のことです」。第六十世となる當麻寺奥院の川中光教住職が寺の由緒を説明してくれた。

當麻寺奥院は奈良県の西に位置し、大阪に隣接する當麻町にある。觀光地図でみると飛鳥の西、斑鳩の南にあたる。

近鉄南大阪線の當麻寺駅が最寄り駅で、改札を抜けてすぐ右手に曲がると一本道だ。参道途中に相撲発祥の地を記念した「けはや座」と呼ばれる當麻町相撲館が建っている。相撲館を過ぎると大和高田バイパスと交差する。このバイパスを左へ折れ、五百メートルほど先に日本最古の官道、竹内街道が東西に伸びている。

春のぼたんの時期だけで十五万人という觀光客が訪れるわりにはまばらに感じる土産物屋を横目にしつつ参道を行くと、もう正面には當麻寺の仁王門が聳えている。その門をくぐると、金堂、講堂、そして曼陀羅堂と呼ばれる本堂が正面右奥に並ぶ。左手には国宝の東西二基の三重塔が建つ。その兩塔の下や、諸堂を囲むように塔頭寺院が所せましと並んでいる。

これら天平時代から平安、鎌倉時代に建てられた文化財の伽藍を抜けると當麻寺奥院の鐘樓門が聳えている。こちらにも負けず劣らずの見事な門だ。その右手の宝物館側の階段から境内へと上がる。



参道の途中に立つ當麻祇園速塚

當麻寺奥院の境内は當麻寺の境内からは高くは見えないこともあり、観光客の半分ぐらいはこの當麻寺奥院の境内を訪れずに、次なる観光地へと向かうことが多いという。

階段を登ると、正面に本堂、その左手に阿弥陀堂が並び、奥には浄土庭園が広がっている。本堂に向かう右手には庫裡、方丈が並び、二河白道の庭園や中庭、茶室、客殿とひろがっている。

この當麻寺奥院本堂をはじめとする伽藍は桃山時代のもものが多く、本堂、方丈、楼門は重要文化財である。さすがに奈良の寺だけあって長い歴史が今に息づいている。

さて、ここまで読まれて読者は當麻寺と當麻寺奥院という説明に何らかの疑問を持たれたかもしれない。

同じ當麻寺なのになぜ奥院と付くのか？

まず、その関係であるが當麻寺奥院は當麻寺の塔頭である。塔頭とは大きな寺院の中に、その寺院の為に作られた寺院の呼び名で、浄土宗でいえば知恩院や増上寺などの本山や、大きな寺にはこの塔頭寺院がある。普通は本山と塔頭とは同じ宗派であることが多いが、この當麻寺は少々変わっている。

當麻寺は役所へは「高野山真言、浄土宗當麻寺」として登記しているという。普通は一宗派だが、當麻寺は二つの宗派が書かれ、二宗派に属しているのだ。

近鉄南大阪線の當麻寺駅



こういうお寺は聞いたことがない。おそらく全国に寺院多々あれど、當麻寺だけだろう。しかも一緒になっている二つの宗派が真言宗と浄土宗である。これも不思議である。

真言、浄土の組み合わせは珍しい。この連載でも以前に二つの宗派によって運営されている宇治の平等院、長野の善光寺を紹介したが、ともに天台宗と浄土宗であった。

仏教の総合大学であった比叡山の天台宗からいくつもの宗派が出たのは、JRのコマーシャルでも有名になったが、その先頭をきつたのが法然上人の浄土宗だ。その浄土宗が生みの親ともいえる天台宗と一緒に運営するのはわかる。しかし高野山密教の真言宗と庶民への教えとして広まった浄土宗とはどこにその接点を見つければよいのか。一体その糸口はどこにあるのか？

実はその接点を探り当てることで、この名刹の歴史がひとりでに解かれていくことになるのである。

ここに當麻寺奥院川中住職の編集発行による「中将姫物語」という一冊の本がある。この本を糸口に名刹の歴史を繙いてみよう。

中将姫物語は、幼くして母を亡くし継母にいじめられ不幸な境遇となる中将姫が、やがて出家し仏道に励むうちに阿弥陀仏と観音菩薩の化身によって織られた往生浄土を説いた曼陀羅を授かり、さらに仏道に精進する中で極楽往生を遂げるという物語である。



参道正面に聳える當麻寺の仁王門

この物語は浄瑠璃、歌舞伎、謡曲などで世に知られ、またその往生の様子を再現した練供養が今も當麻寺に伝わっている。毎年五月十四日に行われるこの練供養には多くの観光客や、学校が午後休校となる近隣の小中学生で大いに賑わっている。

が、興味深いのはこの練供養が午後四時から始まることである。供養の最後、多くの仏に導かれた中将姫が西の浄土へ戻る時がちょうど當麻寺の西に聳える二上山に夕日が沈む時間なのである。

ここで前述した竹内街道に話を戻そう。日本初の官道であるこの竹内街道だが、この街道は『日本書紀』に推古二十一（六二二）年に「難波より京に至る大道を置く」と記録された日本最古の国道で、飛鳥時代に中国や朝鮮などの大陸文化の行き交った道、つまりシルクロードの終点となった道なのである。

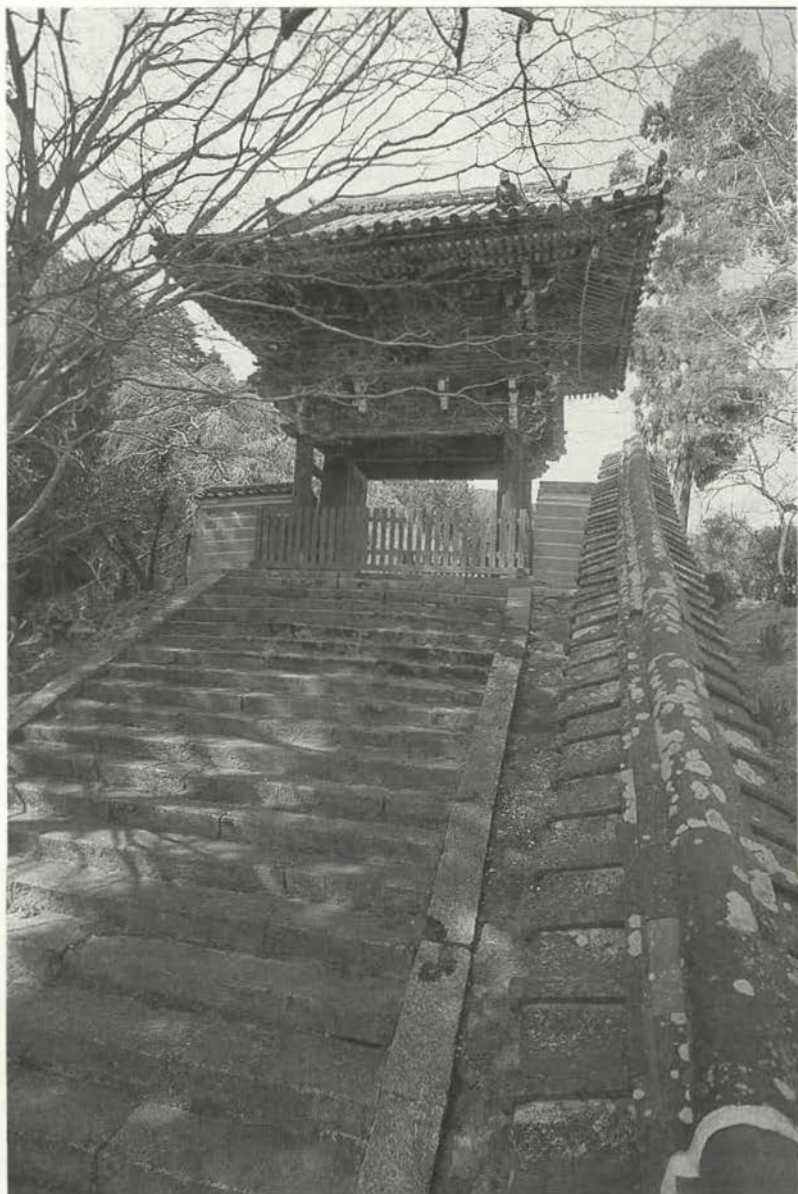
街道を西から東に向かい、大阪府南河内郡の太子町に入ると街道沿いに推古天皇の御陵や聖徳太子の御廟、敏達天皇の御陵などの遺跡が続き、孝徳天皇御陵のあたりから街道はゆっくり坂道となり竹内峠へと登っていく。

竹内峠は二上山から連なる山脈にあり、大阪府と奈良県の県境に位置し、この峠をおりたところが當麻町だ。

かつての當麻寺への入り口はこの東西に走る竹内街道にあり、街道から北に入り東西両塔の間を抜けると當麻寺だった。



曼陀羅堂とも呼ばれる當麻寺の本堂（正面）。左手前は金堂



當麻寺から當麻寺奥院へと続く階段と桜門

竹内峠を下り、さらに東へ向かうとかつての飛鳥の都となる。いまでも修学旅行や古都を訪れる観光客で賑わう飛鳥だが、京都へ都が移るまでは日本の中心だったところである。先に述べた竹内街道沿いの御陵に眠る天皇や太子はここで日本を統治していたのである。さて、ここで飛鳥の都と天皇の御陵に注目してみよう。つまり飛鳥で亡くなり山向こうの太子町に葬られるということにある。

当時はまだ仏教も入っていないころで、葬儀にも呪術的要素が多く、亡くなっても再び蘇ることを考え魂呼びが行われた。再び魂が蘇らないことを確認すると今度は魂鎮めとなる。そして埋葬だが、埋葬地は都から離れた所になる。都に霊が残る可能性を無くさなければならぬからだ。そこで、柩は太陽の沈む二上山の向こうへと送られる。日が沈む場所こそ霊が安らぐ地と考えたのは古今東西を問わない。

ていねいな葬送儀礼により都を出た天皇の柩は、おそらく鎮魂歌や笛などに送られながら西へ向かう。そして竹内峠の麓、大和の地の最後となる二上山山麓の當麻で最後の儀礼を行う。この儀礼を司っていたのが當麻氏だと思われるのである。

當麻寺はもと二上山の西麓に万法藏院禪林寺として推古天皇によって建立されたが、天武天皇によって現在地の二上山東麓に移され當麻氏の氏寺となったといわれている。當麻氏の領地に移された

人々がこの山の間に沈む夕日に浄土を見ていた二上山



ことによって、多くの天皇が眠る西方への入口となる二上山の麓にある寺として多くの人々の信仰を集めるようになったに違いない。

當麻寺の宗派の変遷を見てみると建立された七世紀は南都六宗の三論宗の寺院だった。それが空海が高野山に開いた真言宗に改宗したのは、空海がこの地を訪れたからだといわれている。大阪から高野山へ向かう街道から近いことも要因のひとつだ。

南都六宗から真言宗へと當麻寺は変わっていったが、日が沈む二上山の麓の寺として天皇が眠る西方への入り口として人々に宗派に関わらず認知され続けていたに違いない。

さらに當麻曼陀羅への信仰も篤く多くの僧侶がこの地を訪れた。その中の一人が証空上人である。証空上人は浄土宗の祖法然上人の弟子で西山浄土宗の開祖である。証空上人は度々この地を訪れ曼陀羅信仰を広めたという。そして、この曼陀羅の信仰に呼び寄せられるように浄土宗が入ってくるのである。

冒頭の川中住職の言葉にある応永三年、浄土宗の総本山知恩院が南北朝の戦火に巻き込まれる可能性を心配した第十二世誓阿上人が、京都から什宝を携えてこの地に往生院を建立したのである。

なぜ誓阿上人がこの地を選んだかは、もちろん曼陀羅を中心とした浄土信仰の地であったからだだが、日本浄土教の原点となる『往生要集』を著した恵心僧都誕生の地に近いこともあるのかもしれない。



浄土宗、浄土真宗の原点となった『往生要集』を著した恵心僧都の誕生寺、浄土宗阿日寺



當麻から竹内街道を抜けた大阪の太子町にある飯福寺山門とその奥に見える太子廟

そして往生院が根付くころには浄土信仰の地となり、本尊もそれまでの弥勒菩薩から當麻曼陀羅となり、竹内街道から入る南北を軸にする寺から、往生院を奥に本堂である曼陀羅堂、仁王門と連なる東西を軸とする寺へと変わっていったのである。

つまり、真言宗の地でありながら中将姫の當麻曼陀羅によって浄土信仰の聖地となり、真言、浄土の二宗派による寺院となったのである。

もちろん推測でしかないが、おそらく浄土信仰の地となることで真言宗の當麻寺も経済的に安定し、浄土宗としても浄土教原点の地に大和本山としての伽藍を創建することができ、こうした思惑が働いたのかもしれない。相入れにくい真言宗と浄土宗が一緒になるには、長い歴史と當麻ならではの特性があるからに違いない。

だが、この浄土信仰の地に浄土宗の寺院として當麻寺奥院があることで、當麻寺の曼陀羅信仰がより庶民に受け入れられるようになったことは間違いない。

現在は當麻寺の塔頭として往生院から奥院となったが、浄土宗の檀信徒なら、古代からの浄土信仰の聖地として一度は足を運んでみたい、それだけの魅力ある名刹である。

(ルポライター)



落ち着いた行まいを醸し出す當麻寺  
奥院の中庭

表紙は語る

# 車窓から

写真と文

## 川井 聡

# 12月

乗降客の途絶えた  
駅には哀愁だけが残る  
あるいは不意に  
客車の窓の木枠から  
懐かしい旅  
の記憶がよみがえる  
鉄路の果てに  
彩っていくひとり  
ひとりの人生

懐かしい時間に帰ってみませんか？

「汽車がトンネルの中を走るときは、外より早く走っている」

子供の頃、汽車に乗っていて発見したことです。それは、窓から見える物がなかったり轟音のせいで、そう感じるだけなのかも知れませんが、きつと錯覚だろうな、と思っていました。早く走っているように感じるのは快感です。ところが運転士に聞いたところ、トンネルの中は踏み切りも駅もないうえ直線も多いから何々もの長いトンネルなど制限速度も高く、スピードも出ているんだそうです。

高速で走り抜けた汽車がトンネルを抜けると、一瞬で、光の世界に包まれます。

新しい年は、ぜひトンネルを抜けた良い年にしたいものです。

今年の冬は汽車に乗って、懐かしい時間に帰ってみませんか？

一年間ありがとうございました。

かわい さとし 現在、国内の鉄道旅行ガイド制作のため、日本全国のローカル線と温泉をめぐるながら取材中。自宅より取材先にいる方が長いらしい。

連載

無明抄

思惟  
すてかねっ

秦  
恒平

8

最終回

「そうだ、京都行こう」と、佳い写真のコマーシャルに再々出会う。乗り物だか旅の会社なのかスポンサーははきと記憶しないのに、写真の景色はいつの場合もみなよく知った懐かしいものばかり。ことに最近の御寺泉涌寺はひとときわ懐かしい。ほんの足元に高校があった。教室から抜け出しては泉涌寺や月輪御陵をそぞろ歩き、歌を作った。

ひむがしに月のこりゐてあまぎらし丘の上にわれは思惟すてかねつ

日吉ヶ丘高校の二年生三学期ごろの「拝跪聖陵」と題した連作の第一首であった。こう詠んだときの思いをいくらか覚えてる。早朝、泉山の空はあさく霧をふくんで白い残月をうかべていた。「思惟すてかねつ」が咄嗟に口をついた。ほんとうにあの時そう思っていたのか、そんなふうな日頃の自分を思っていたのか。どっちにしても、「思惟」を捨てかねた自分を肯定できない心地でいた。悩むという気分であるより、諦めているような心地でいた。「かねつ」という現時にねばりついた自覚のまま、ここから脱却するような日がついに来ないのではないかという、かすかにこわいほどの断念が動いていた。

重い荷物をひきずって、あれからもう四十五年ほど歩いてきた。同じ場所に同じ無明を抱いてわたしは佇んでいる。高校生のままだ。なさないという気持ちすら摩滅してきている。あの空にもやっとほの白く淡く浮かんでいた月のように、ひよわく生きていることが頼りない。らくになつていない。

あの頃、角川文庫の『般若心経講義』を読み、岩波新書の『禪と日本文化』を読み、暫く経ってから妙好人にかんする本などを讀んだ。仏像に意識してまみえることも急に増え、関連の知識も、またいわば美的な身軀履もついてくるのは致し方なかった。それにもかかわらず、仏さまを「美しい」かどうかと眺めるのはどんなものかという気持ちも、いつも有った。美しいから仏さまであるのではなく、いわば「ありがたい」から仏さまなのだ、熟さない物言いではあるが、そんなふうに考えていた。

話題を急に転じてしまうようだが、それほどでもない、わたしの育った京都市では、比較的にある種連続して大きな建造物が物議をかもすことが多いのは知られている。最近では三条と四条との間にバリからもたらした橋をかけるかどうか揉めていた。再建計画のホテルの身の丈が高過ぎるとも揉めていた。新京都駅ビルにもぶつくさの声がある。

その昔にも揉め、いまでも悪口の的になっているのに、駅前の例の白い「ローソク塔」がある。あれより以前に、洛東の高台寺の観音さまが問題にされた。びっくりするほど大きいこと、コンクリート建造のこと、そして東山の翠巒をおかすことなどが問題になった。今では足元へ近寄るにも関所がきびしいが、できた頃はむきだしで、お膝にものぼって遊んだし、真下で盆踊りの輪が十重二十重の真夏の楽しかったのも覚えている。

仏さまを「美しい」「優しい」と感じた、あの観音さまが第一番の体験であった。その実感のまえにはいかなる大人たちの物議もほぼ無意義だった。翠巒にもしっくりと似合っていると思つたし、露坐の大仏がああ貧しかった時代にコンクリートで出来ても、時代にも

理にもかなくなっていると感じた。ましてや奈良の半仏といわれた大きな露坐仏がもとと在したまさに雲居寺跡とも知ってゆけば、ふさわしく、時宜にもかなくなっていた。なによりもいかなる悪声にも犯され難い観音さまの大きな慈悲像であり、あの頃も、そして今でもわたしはあれはあれで「ありがたい」と思っている。仏像巡拝を畏れ多いがつい趣味のようにははじめたきっかけは高台寺の観音さまであつた、「美しい」と思っていた。

この「美しい」は、モナ・リザの絵を、ピカソのゲルニカや岸田劉生の少女像を美しいと言つたり思つたりするのは、ちがう。ちがうことには、早くから気が付いていながら、しかも仏さまを「美しい」ビューティフル」と眺めるのを申し訳なく感じていたのは、まだ「ちがう」が、はつきり分別できていなかったのも間違いない。

これはお坊さまに聞いてみたいことだが、仏さまを「好き」という気持ちはあるものだろうか、個々の仏像になら、それは自然にある。挙げはじめたらキリがない。それに「吾が仏尊し」というほど、いわゆる持仏を敬愛するのは仏教の風にもなっている。わたしなども、つい阿弥陀如来や観音さまに心ひかれてゐる。久しい偶像崇拜の風習に美術の鑑賞感覚が侵入してもいたし、「派」を立てて宗門が林立したことも影響した。それはそれで人間の歴史のしからしめた結果であるから、ここで議論は中止しておくが、ごく最近になって、わたしは仏さまこそが「美しい」のではないかと感じかけてきた、それを問題にしてみたい。

法の世界の深奥で広大なことは、察している。凡俗の及びがたいことは、とうに断念も

している。「仏」とは何か。もし、その解説の役がふられたら分かりませんと辞退せざるをえない。もしも、仏さまのえらさや尊さを感じたまま言えといわれたら、今のわたしなら、仏さまこそ「美しい」「優雅そのもの」「ビューティフル」だとためらわずに返事をする。わたしの発見だとはいわない。人に幾重にもそのように示唆されているうちに納得してきたのである。

キリストもすばらしい。ソクラテスもすばらしい。達磨さんもすばらしい。むろん、同じ言葉をつかって仏さまもすばらしい。しかし、その存在感を「美しい」「優雅そのもの」「ビューティフル」などと言えるのは仏さまであり、仏の真に偉大な一切はそれで言い尽くされるからすばらしいのではないか。大圓真如にして空である典雅さ。キリストもソクラテスも老子も、また達磨も不動も、菩薩ですらも如来のように空なる存在自体が「ビューティフル」とは見えない。頑張りという角がある。知性があり理性がある。仏さまには知性も理性も無い、というより有る必要もなくなっていると感じたときに、なんとも言えない、深い賛嘆の念を覚えた。

肩肘をはり腕をふりまわし思惟思念を身に抱いた、また目をみひらき睨み据えて憤怒のさまの、また和顔愛語を表情に示された、そのような如来の在りようを想像するのは、それ自体が、人間的な、あまりに人間的な錯覚であり矛盾である。仏さまが「美しい」とは、そういう意味である。こんなことを言葉にして書いたり言ったりしていることも「思惟すてかねつ」なので、仏さまの美しいのは、仏さまはすでに思惟しないからであろう。一会

一切会のそんな「一」も無に帰しておられると思う、それもわたしの無用の思惟を出ていない。「我思う、故に我在り」の「我」も「思う」も「故に」も、みな途方もない障りである。そんなものがあるから人間はとて「美しく」はなれない。と同時に、人間にはそういう人間を超えた「美しさ」仏さまの「美しさ」は願わないという生き方もあるのだろうと思う。それまで否定する気には、なかなか、なれない。そして、わたし自身は迷い惑いその間でまだまだ揺れ続けている。無明といわざるをえない。

残り少なくなってきたわたしの時間のために、わたしは、もう経典を読むまいと思う。理解も届くまいし莫大な量にも幻惑され、悲しみが深くなるだろう。南無阿弥陀仏、てよしと信じ、まかせてしまいたい。アーメンでも構わない。墓もほしくないし、戒名や聖名もいらない。葬式も願わない。

では、何を願っているか。恥ずかしながら、安心して死ぬるといいなと願っている。栄誉や名誉とも縁はなく、望まない。一つでも思い残すことを少なくして置きたい。どうすればいいか、よく分かっていない。分からないほうがいいのかも知れないと思いかけている。ずいぶん、いいかげんであるが、それが良い加減なのだろう。やっぱり「思惟すてかねつ」のクチで、なにをしても大差はないようだ。ここで困って、文字通り退屈してもつまらない。

育ての母の三回忌を京都の出町柳まで帰って、花果てた萩の常林寺でつとめてきた。妻と二人である。お坊さまは親子でお二人である。四人の法事で、声をそろえて経をよみお

念仏をする。

次の日、生みの母の国の近江を半周し、石山寺で美しい多宝塔を眺めてきた。

また次の日は、静かな小雨のなかを、洛北のある大学で棟方志功展を見てきた。蓮如の言葉だとして、「信がなければ念仏申しても役にたたぬ」意味のことが画中に書かれていた。佇んで、わたしは、少し気が沈んだ。そうやろか。ちがうのとちがうやろか。また余分な「思惟すてかね」る種を心に植えてきた。困ったことだ、順序が逆であつたら、この心あしい連載を読んでくたさつていて、少し話し合つてみようと言われていたのかも知れない菩提寺の若いお坊さまに、お尋ねすることが出来たのにと思ひながら東京へ帰つていった。「信」と「念仏」との間が、十万億土も隔たつて感じられる無明の闇にしばしば覆われながらでは、所詮「安心」は得られまいかと、心細かった。

(以上)

はた こうへい

昭和10年、京都市生まれ。同志社大学美学芸術学科卒。昭和44年小説「清経入水」で第5回太宰治賞受賞。平成3年東京工業大学教授。平成8年同退職。現在、日本ペンクラブ理事、日本文藝家協会会員。著書に「みづもりの湖（うみ）」「冬祭り」「京都感覚」「羅山」「死なれて・死なせて」「親指のマリア」など、エッセイ、評論集、小説多数。すべてを「秦恒平・湖の本」に収め、継続刊行中。

# 記 時 歳 教 仏

陰曆十二月、別称、師走。

この月、僧（師）が東西に忙しく走るから師走と呼ぶ、というのが一般の説ですが、一年の終り、為果<sup>し</sup>つ月が転じて師走になったという説もあります。

いずれにしろ語感としては、慌ただしい歳末の人の往来を思わせて、他の月の古称よりも馴染み深い言葉です。

うすうすと紺のぼりたる師走空

飯田龍太

この俳人は「紺」の色をとても大事にして、この色を読み込んだ句には名句が多いと思われます。この句もいかに、という感じ。大きな景と色が鮮やかに見えてきます。

父祖の地に闇のしづまる大晦日

飯田蛇笏

十二月末日を大晦日といいます。人それぞれに過ごし方がありますが、この俳人は深々と更けていく夜の静けさのな

## 師 走

かに何を見たのでしょうか。同じ苗字でお気づきだと思いますが、蛇笏は一句目の作者、龍太のお父上です。

ひとひとりころにありて除夜を過ぐ  
桂 信子

大晦日の夜を除夜といい、寺々では百八の煩惱をひとつひとつ救うというこで鐘をいんいんと撞き鳴らします。みな何かしらの感慨のある夜。ああ、今年ももう終わるのですね。

# 一筋の道を求めて

藤井實應著 ■ 藤井正雄編

— 祖師との出会い、父と子の人間像 —

A5判・並製  
本文250頁  
定価2,300円〈税込〉

株式会社文化書院  
千代田区飯田橋4-5-4  
102-0072  
TEL. 03-3261-0480  
FAX. 03-3261-0479

身障者から学ぶ

連載第六回

# バリアフリーを めざして



高木悦男

Y小学校を巣立った乙武君は、地区の区立Y中学校に入学した。入学した生徒は、Y小学校から三、K小学校から二の割合であった。

乙武君の入学に先立ち、Y中学校では乙武君を受け入れる準備を進めていた。Y小学校からM校長、O教諭、都立補装具研究所からM氏、そして私が呼ばれて種々話し合いが行われた。小学校と中学校の大きな違いは、小学校は担任制が中心であるのに対して、中学校では専科制を取っている。専科制を取ると教室移動が多くなる。それだけ乙武君に対する配慮が必要となるわけである。

この会議でO教諭から、Y小学校における乙武君の日常生活（給食、掃除、トイレ等）のことから、友人関係、教科、特別活動等の状況と、両親の協力的な姿勢についての話があり、みんなて話し合いが持たれた。O教諭は、四肢が欠損しているだけで、不安を持って迎えないでほしいこと、彼の出来ること、出来ないことをしっかりと把握していれば、教師にも大きな負担にならないことが強調され

た。

これとは別に私は、区の嘱託として学務課のO係長に随行してY中学校を訪れ、施設の改良について学校側と話し合った。校舎内の段差のこと、校舎からの出入り口、体育館の出入り口など二、三か所に、スロープをつけることにした。また机、椅子は、Y小学校で乙武君が使っているものを持つてくることになった。

乙武君が入学してから間もなく、飯盒炊爨をする遠足が相模湖近くで行なわれた。二枚から生徒が集まっているので、仲間意識を早い時期に育てたいという学校側のねらいがある。私は巡回相談員として、学校側の要請でこの遠足に同行した。乙武君が小学校のときと同様、明るく、リーダー的に活躍している姿を見て、私は安心した。

その後、むしろ乙武君のことについて、「乙武君は弱い子に命令的である」とか、「先生に反抗的になることが多い」などの声

が聞こえてきたが、私は成長過程で起こり得る一時期のことと受け止めていた。

二年生になったとき、クラブ活動でバスケット部に入学したと聞いて驚いた。体育の時間に習って興味を持ったのであろう。バスケットはドリブル、パス、シュートとコート中を走り回る激しい運動である。このことは乙武君も充分知っているはずであるし、乙武君がシュートすることはとうてい不可能である。それにもかかわらず、学校側は入部を許可したばかりか、監督である教師は、乙武君が三年生になると、対外試合のとき、選手交代でどこかで一回は、必ず彼を試合に出場させたというから、本当に敬服の一語である。

また、この監督の方針に部員もみんな賛成していたという。乙武君の日頃の練習態度、良い友人関係の現れであろう。乙武君はまさに障害者であって障害者でない、一人の人間であると言いたい。

中学二、三年になると、ほとんどの生徒は

高校受験を目指して、夜は進学教室に通うようになる。乙武君は段差のある他の地域まで電動車椅子で通うことは無理である。そこで母親は自分が進学教室の代わりになることを決心し、自分用の教科書をそろえ、乙武君が学校で学んでいるときに、自分なりに勉強して、わからないところは乙武君が寝てから夫に聞くなどしたとのことである。教えるというより、二人で学び、励ましあう日々であったそうだ。

高校受験は本人の希望と担任教師の意見で、都立T高校と決まった。教頭からT高校に、乙武君の身体的状況等について、前もって話をした。

「それなりの点数を取れば、差別することなく合格にします」

との確約を得て、受験して見事合格した。

Y中学校の卒業式に、私は来賓の一人として出席した。巣立ちゆく乙武君の姿を見て、H学務課長の判断の正しさが頭をよぎった。

卒業式を終えて、乙武一家三人と私でH学



務課長宅を訪問した。乙武君の義務教育終了とT高校への進学の情報である。これは乙武君に、世話になった方への感謝の気持ちを持ち続けてほしいと願う、私の思いからである。T高校への通学のため、乙武一家は住み慣れた世田谷区から、西早稲田へ移った。

T高校に入学した乙武君は、アメリカンフットボール部のマネージャーの仕事に没頭する日々を送った。

マネージャーは「緑の下の力持ち」と言われるように、大変な仕事であった。何事にも一途な彼は、真剣によく務めた。試合は土曜、日曜が多く、休みはほとんどなかったと聞いている。

「大学受験は浪人を覚悟していてね」

と、早い時期から両親に話しをしていたようだ。アメフトのマネージャーには、小、中と一緒にだったB子がいたのも励みになったようだ。B子は、私が一、二年のときに担任して眼の澄んだ賢い子であったと記憶している。

後に乙武君は、

「女の子とつき合うようになってから、女の人から優しさを受け、自分自身も優しくなれるようになった」

と、述懐していた。

入学してから各種のクラス対抗の競技にクラスの中心となって活躍した。

卒業を間近にして、卒業式のときに卒業生を代表しての挨拶の募集があった。三人の応募があったそうであるが、その中で乙武君が選ばれた。その理由は話の内容がすぐれていたからだそうだった。

卒業式の晩、B子の母親から私に電話があった。

「今日乙武君が、卒業生を代表して答辞を読んだのですよ。そのあまりに立派な態度に、感激して涙が出てしまいました」

大学受験を彼はW大学を希望した。W大に問い合わせたところ、やはり

「それなりの点を取れば、差別なく合格にします」

とのことであったので、受験したが残念にも

不合格であった。

「高校生活を思いっきりエンジョイしたので、後悔していません」との報告があった。

一年間新宿の予備校に通うことになった。

私の家内が二回ほど新宿で見かけたが、女の子が二、三人つき添っていたそうである。

四肢が欠けていても、異性からもてるということは、乙武君に男性的魅力、いや人間

としての魅力が備わってきている証であろう。

一年後、再びW大学を受験し、見事に政治経済学部に入學した。

W大学では、地元の商店街と協力して、街作りに取り組んでいる。乙武君は学生を代表して街作り協議会の一員となり、障害者の立場から、さまざまな提言をし、いろいろなイベントにも積極的に参加している。この乙武君の活動の様子を、九十七年NHKテレビ総合で取り上げ、彼の一週間を密着取材して、『青春探検』という番組で放映された。その中で恩師訪問ということで、拙宅で私と乙武君の対談を行った。

そんなこともあり、その頃から乙武君のもとに講演の依頼が来るようになった。

そのひとつ母校Y小学校で、子供たちに話しをする様子を見に行った。実際に自分の名前を書くところを見せたり、ボールをドリブルして動き回る様子を見せたりして、子供や親たちに感動を与えていた。

乙武君は地元の街作りからスタートして、バリアフリーの活動に積極的に取り組んでいる。最近では街作りについて意見を求める講演依頼が、遠く九州からも来ていると聞いている。

バリアフリーが叫ばれ、街から段差がなくなり、歩道橋も車椅子で渡れるところが始まっている、駅にはエレベーターも増えつつある。

しかし、まだまだ心のバリアフリーは遅れているような気がする。障害者がいじめの対象となったり、障害者が近づいただけで顔をしかめたり、障害者に対する偏見があるのは確

かである。

乙武君は、これから先も、心のバリアフリーについても活躍の場を広げていってくれることであらう。

身障者は、健常者以上に努力しなければ、職につくことさえ難しい今日である。しかし健常者は身障者から学ぶこと、見習うことがたくさんあるように思われる。高齢者社会を迎えている今日、まさに身障者から多くのことを学び、安全な街作りのために、自分自身一人一人の問題として、官民がひとつになって、バリアフリーに取り組むべき時代に来ていると思うのである。

明日の日本のために、乙武君のますますの活躍を期待するものである。

(おわり)

連載

# 選拔集を 拝む (六)

須藤隆仙

法然上人鑽仰会理事  
函館・称名寺住職

## ● 既得の世界

『選択集』から学ぶ第三点は、「念仏信心は既得の世界である」ということであります。何を既得するかといいますと、悟りのパスポートをであります。『選択集・第十六章』に「略選択」といわれる部分があります。『選択集』の要約ともいえる部分でありまして、先徳のなかには、『選択集』はこの部分から拝読すべきであると教えられたお方もおられました。次のような御文であります。

「それ速かに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に、且らく聖道門を閑きて浄土門に選入すべし。浄土門に入らんと欲せば、正・雑二行の中に且らく諸の雑行を抛捨てて選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲せば、正・助二行の中にはなお助業を傍らにして選んで正定を専らにすべし。正定の業とは即ち是れ仏名を称するなり。仏名を称すれば必ず生ずることを得。仏の本願

によるが故なり」

名文でしかも解り易いですから説明の要もないでしょうが、この世での苦から離脱しようと思ったならば、聖道門（聖者の仏法）を捨てて浄土門（凡夫の仏法）に入るのがよく、浄土門に入ったならば純正の道を選んで雑行は捨てるべきであり、純正の道を行じようとしたならば中心になることを行じて、補助的なことは傍におくべきである。その中心の行とは即ち南無阿弥陀仏と称えることであって、称えれば現世での命を終えた時に必ず極楽往生することができなのです。それは阿弥陀仏という宇宙の真理によるものなのです」と、こういった意味であります。即ち念仏信心（南無阿弥陀仏と称えること）には、「必ず生ずることを得」という救いが確約されているわけです。

このことを一ばん最初に教えられたのは、もちろん釈尊であられますが、第二の釈尊といわれた龍樹菩薩も早くにこのことを宣説さ

れ、称名念仏することによって、現世で不退転の極樂浄土行きの地位が確保されると教えて下されたのでありました。これが即ちここにいう「既得の世界」であります。私たちはこの苦しい現実世界において、すでに極樂往生という悟りの世界、離苦の世界が、確約されている身分であるということを自覚し、自暴自棄にならず、希望をもって、ものごとを善意に解釈して、生きていかなければならないと思うのであります。元祖様はこのことを、「人の手より物を得んずるに、すでに得たらんと、いまだ得ざると、いずれか勝るべき。源空はすでに得たる心地にて念仏は申すなり」（『勅修御伝・二二』）と教えられ、また、「念仏にいさみある人は、無辺の悟りを開くべき人なり」（『同・四五』）と仰せられたのであります。

## ●口に出して真実

元祖様は釈尊が一代の仏教を、浄土三部経



を頂点とする大ピラミッドに構築されました。そしてその浄土三部経の本旨を明らかにすべくお述べになられたのが『選択集』であります。ですから第十六章の結びに「およそ三経の意を案するに、諸行の中に念仏を選択してもつて旨帰とす」と仰せられているのであります。この『選択集』のさらにその要旨を述べられたのが『一枚起請文』であります。それには「観念の念にもあらず（略）疑いなく往生するぞと思いとて申すはかには別の仔細候わず」と仰せられて、三部経の帰結が称名念仏（口に南無阿弥陀仏と称える念仏）にあることを明確にされたのであります。これはもちろん『選択集』でもいつておられることとあります。

その称名念仏とは、私たち凡夫のために、阿弥陀仏と釈尊と諸仏とが選んで下されたものであります。称名念仏には仏教の真理一切を内容とする勝れた価値があり、誰でも称えられるという易しさがある、それで仏様たち

が選んで下されたのでしよう、と元祖様は教えられました。仏教の真理一切を含むということは、「屋舎の名字の中には棟・梁・椽・柱等の一切の家具を摂す」るようなものだと巧みな譬喩で説明しておられます(第二章)。易しいということはすべての人に通じることでもあります。金がなくて仏堂寄進などできない人でも、病気で歩けない人でも、煩瑣な仏教学などわからない人でも、みなお念仏なら称えることができるのです。しかも世の中は、貧困者・弱者・凡庸な人のほうが多いのであって、その多い人たちも平等に極楽往生させようとして、阿弥陀仏は称名念仏を選択してくれたのだというのであります。

ここで私は、称えるという口に出すということについて、大変に感動したことが最近あるのであります。それはテレビを見ていたときでありました。青森県下北半島の漁村で、まだあどけない少年が、厳寒に氷と闘いながら漁をしているのです。一時あこがれて東京



に出たのですが、父業を継ぐため帰ってきたのだそうです。アナウンサーが「東京が恋しくありませんか」と聞いたところ、その少年は、「毎日思っで心中泣いているよ。でも口に出すと真実になってしまいうから」と答えたのでした。私はその言葉に、全身水をかけられたような衝撃を感じました。「口に出すと真実になる」、何というすばらしい、それこそ真実の言葉でありましょうか。心中に思っているうちは、あくまでも現実ではないが、「東京が恋しい、こんな生活はいやだ」と口に出してしまつたら、それは真実のこと、本当のこと、現実のこと、となつて、また東京へ出奔してしまふ、だから自分は口には出さないのだというのです。口に出す称名念仏の尊さ、声に出す宗教的な意義、念称は一（念と称とは是一つなり）といった教条は、とうに知っているつもりでおりました。しかしそれはまだまだ至らないものであったということを、いやというほど知らされたのであります。私は泣

きました。テレビに向かって合掌しました。声の真実、称名念仏の真実というものを、そしてその真価を、私はこの少年から教えてもらったのであります。少年は、私にとって仏様だったのであります。

## ●念仏はすべてを助ける

今、手元に岩波書店の新刊『哲学・思想事典』が届きました。さっそく「選択本願念仏集」の項を引きますと、仏教界に大きな反響を与えた。註釈書の多さは他に類例を見ず、その数は五二一部に上ることからも、後代への影響の大きさをうかがうことがでる（略）称名念仏を唯一の往生行として特立させたことは、鎌倉仏教の宗祖たちに甚大な影響を与えた」と記されております。まさに正しい評価でありましょう。

しかし『選択集』は仏教改革への画期的書でありましたから、他宗から猛烈な非難の声も上がり、反駁書が多く出ました。とくにひ



どいのは、元祖様ご入滅の十年後に生まれ出た日蓮聖人であります。主著『立正安国論』の著述は法然誹議、選択集糾弾で終始されているのであります。法然上人の『選択集』は、『法華経』を捨て・閉じ・聞き・抛ったとして怒っているのであります。しかし『選択集』をきちんと拝読いたしますと、決してそうではないのであります。『法華経』も極楽往生を明かす経（傍明浄土經典）だとしておられますし、「念仏をこそ信じたれとて、諸仏菩薩の悲願を軽しめたてまつり、法華・般若等のめてたき経等を悪く思ひて誹る事は、ゆめゆめあるべからず。よろずの仏たちを誹り、諸の聖教を疑ひ誹りたらんずる罪は、まず阿弥陀仏の御心になうまじ」（七箇条起請文）というのが元祖様の教えなのであります。

元祖様の教えは、慈悲ということて貫かれているのであります。それは『観無量寿経』に「仏心とは大慈悲是れ也」とあるのを基本とし、弥陀ご本願も「平等の慈悲に催うされ

て普く一切を摂せんがため」(『選択集・第三章』)にのぞ展開であるのだから、当然のこととございましょう。ですから「選択」ということはその「慈悲」に裏打ちされているわけであります。選択に摂取の意味があるのはそのためでありましょう。元祖様ご自身も専ら慈悲を行じられたのであります。

それですから、念仏というものは全体とし、ものごとを救う働きになっているのでありまして、これはわが国宗教史の上で、改めて認識され直すべき問題ではないかと愚考しているのであります。

例えば、右述の日蓮聖人にしても、元祖様や『選択集』のこと、お念仏のことなどを口をきわめて悪く言われましたが、何と晩年は、そのお念仏に助けられているのであります。

身延の山で「衣は薄し食は絶えたり。夜は寒苦鳥にことならず」(『春初御消息』)と苦しまれた日蓮聖人は、六十一歳の九月身延を出て池上に向かったのですが、途中道に迷って



大苦勞し、ある寺に助けを求めて救われたのであります。何とその寺は浄土宗の寺だったのであります。日蓮宗出身の優れた仏教学者紀野一義先生はこの事実を、「日蓮が生涯攻撃してやまなかった浄土宗の寺院に一夜の宿を借りたということは仏縁の深さを思わせておもしろい」(中央公論社『日蓮』)といっておられます。熱烈な法華信者として知られる宮沢賢治さんなども、島地大等という浄土真宗の学僧が書かれた『法華経』を読んで入信し、終始、念仏信者の両親に支えられて生活し、遺言の没後『法華経』一千部配布供養も、その念仏者の親に実現してもらったのでした。このようにお念仏は、あらゆるものを助ける力なのであります。

## ● 日本仏教を変える

元祖様に帰依してやまなかった先の関白九条兼実公の要請により『選択集』は撰述されました。元祖様六十六歳のときであります。

この年元祖様は病床に伏されたので、兼実公は万一のことを考え、後々の形見にとも思い、浄土宗奥義書の撰述を懇請されたのです。草稿本は京都廬山寺（もと天台宗で、昭和二十三年円浄宗として独立）にあり国の重文ですが、内題の「選択本願念仏集」と冒頭「南無阿弥陀仏 往生之業念仏為先」の二十一文字は元祖様の直筆であり、本文は三人の弟子が文筆記しております。内容十六章は頭腦明晰な元祖様らしく、きちんと順序立てて述べられております。大意次の如くです。

① 仏教を聖道門と浄土門とに分けて浄土門を勧め、浄土宗名と浄土三部経と浄土宗の伝統（血脈）を示す。

② 浄土門の行に正行と雑行とあることを明かし、正行に正定業と助業とがあることを明かして、正定業（称名念仏）を勧める。

③ 称名念仏こそ、最高価値の易しい行であり、阿弥陀仏が私たち凡夫のために選択して下された行である、ということ。



④ 『無量寿経』に称名念仏以外の余行も説くが、それらは念仏を助成するものである、ということ。

⑤ 念仏には大利益の功徳がある、ということ。

⑥ 末法の世に他の教えは滅んでも念仏は残って人々を救う、ということ。

⑦ 念仏を称える者だけが阿弥陀仏の光明に救い導かれる、ということ。

⑧ 念仏行者は、真心、深く信する心、共に極楽を願う心、の三心が必要とし、とくに罪惡の凡夫を仏が救って下さるとの深く信する心が大切である、ということ。

⑨ 念仏行者は仏を敬い、臨終まで現世での生活は念仏相續であることを勧める。

⑩ 阿弥陀仏は念仏行者だけをほめ讃えるということを示す。

⑪ 念仏する人は泥水中に咲いた蓮華のような存在であることを明かす。

⑫ 釈尊は『観無量寿経』で諸種の善行も説

かれたが、称名念仏だけを弟子阿難に直授されたことを明かす。

⑬念仏は最大の善行であるということ。

⑭すべての仏様たちが念仏往生の真実を証明して下されていることを明かす。

⑮念仏行者は、いつでも阿弥陀仏はじめ諸仏・諸菩薩や諸天・諸神に念じ護られている、ということをも明かす。

⑯釈尊は称名念仏を舍利弗にも直授されたことと、これがすべての仏様たちが凡夫のために選択して下されたものであること、そして善導大師の教えの大切を明かす。(以上)

これを拝しますと、元祖様がいかに緻密に論述なされたかということが、よく解るのであります。天台の学僧が、一遍読んだだけでは別段たいしたインパクトも感じなかったが、二遍めは偏見の強い書ではないかと思っただが三遍めからは深い深い意味を蔵する書との思いが濃くなり、以後はただただ信心を増していくばかりであった、と告白されたのも、



むべなるかなと随喜する次第であります。

元祖様は末尾に、「高覧を経て後は、壁底に埋めて窓前に遺すことなかれ。恐らくは破法の人をして悪道に堕せしめんことを」と述懐されたのであります。ところが元祖様ご入滅の年にはすでに開板され、八年後の承久二年(一二三〇)には兼実公の孫九条道家の邸でこれが講讃されているのであります。講師は真言宗静遍師でありました。師は『選択集』を反駁しようとして読んだところ、却ってその尊さに驚き、大崇拜者になった人です。それより百年後の元応二年(一三三〇)には、宮中で御前講義までされたのであります。講師は鎌倉光明寺の如空上人でした。

特にここに強調された一行専念の主張は、親鸞聖人や日蓮聖人はもちろん、道元禪師などにも影響し、日本仏教を変えたのであります。頭が下がるのみであります。(お十念)

御法語に聴く

往生のためには念仏第一なり。学問すべからず。ただし念仏往生を信ぜん程はこれを学すべし。

【渋谷入道道遍伝説の詞】

往生をかなえるためにはお念仏が第一です。学問は必要ありません。ただ、お念仏をとனால்往生がかなうということが信じられるようになるには、学問を修めるべきです。

学ぶべし、学ぶべし

「生涯教育」なる言葉が市民権を得て久しい。教育——学びの必要性があらためて省みられている表れでもあらうが、必要であるとともに、それは人々が「学び」に対する飽くことのない欲求を抱いている証でもあらう。

ひと口に「学び」と言ってもいろいろある。時の経つのも忘れ机に向かつてかじりつくように文献を読みあさるのもそうならば、講演会などに参加して人の話に耳を傾けるのも、広く言えば旅をして知らない地域の文化や人と触れ合い、見聞を深めるのも「学び」だ。そうした意味では、毎日、いや、今、この一瞬一瞬の過ごし方そのものが「学び」であるとも言えそうである。

古来、いずれの思想、哲学、宗教においても、「学び」を勧めていないものはないのではなからうか。釈尊は「学ぼうとしない人は牛のように老いる。肉は増えていくが、知恵は増えない」（法句経）と、「学」に対する怠惰な姿勢を戒めている。「学道の人、参師聞法の時、よくよく窮めて聞き、重ねて聞いて決定<sup>けつじょう</sup>すべし。問うべきを問わず、言うべきを言わずして過<sup>あやま</sup>ごしなば、我が損なるべし」とは、かの道元禅師の言葉（正法眼藏随聞記）だ。こうした示しはいくらでもその例を挙げることができる。

法然上人が修行時代、比叡山で「智慧第一」と称賛されていたことは今さら言をまたない。その「学び」を極めた上人自らの言葉とは思えぬ「学問すべからず」。革命的とも破天荒ともとられかねないこの奇抜な教示は、大胆を通り越してある種の凄味さえ感じさせるひと言でもある。聖賢といわれる人々と、そしてまた上人自身のそれまでの足跡と符合しないようではあるが、裏を返せば「学び」を極めた上人の言葉だからこそ、実は納得もいく。

なぜか。

「学問すべからず」だけならば、矛盾が矛盾のまま、漂い流れる霧のように、読む者の心をあやふやに包み込んでしまいかねないが、この文章の重みはむしろ後半にあるのではないか。そしてここをこそ味わってみれば、おのずとその答えも見えてくるのではないか。

阿弥陀仏の救いは、その慈悲にすがり名をとなえる者に平等にふりそそがれる。これは阿弥陀仏自らが誓われたことである以上、我々がどうのこうのと理屈を並べ立てて疑いをはさむ余地はない。上人の「学び」の帰着先はこの一点にあった。

差しのべられた弥陀の慈悲をそのまま受け止め、念仏一行に邁進できるならばそれが一番である。いや、そうあるべきである。しかし、額面通りに信じろといわれても、はい、そうですかとなかなか素直に受け入れにくいこともあるのが人間の悲しいところだ。ところが、時にはそうした姿勢も自己向上への第一歩ともなりうるから、ことはちよつと複雑になる。上人はこの両点をも見据えていたのではなかったか。

阿弥陀仏は、救いの手を伸ぶ要件として、救われるべき我々の側に学問や智慧というものを求めなかった。この点においては「学問すべからず」である。しかし、阿弥陀仏が我々にもつとものぞむところの「信じ、となえよ」の点を、自身の上にその通り体得せしめるものとしてならば、「学すべし」なのである。

もつとも、智偏重を危惧した言葉をも上人は残された。「学生骨になりて、念仏やうしなわんずらん」（つねに仰られける御詞）は、学者ぶつて念仏についてあれこれ議論してばかりいては、いつしか本来の念仏行をおろそかにしてしまいかねないことに注意を促したものだ。確かにこれは、気をつけなければならない。

弥陀の救いを、慈悲を疑ってかかれとそそのかしているのではない。

弥陀の勧めのままに、念仏一途に励んでいる人を軽んずるのでもない。この稿題を「学ぶべし、学ぶべし」などと、それこそ大胆不敵なものにしてしまったが、「智者のふるまいをせずして」と遺言された上人にたてつくつもりも毛頭ない。ただ、弥陀の、上人の、そうしたやさしい心配りに安閑とし、どつぷりとぬるま湯につかっている傾向が否めなくはないが、自らを省みるべきことに、この言葉からあらためて気づかされただけである。

ストレートに信に入りえる者、智から信へと入る者。ケースはいろいろある。わからないことが生じたならば、解決へ向かう姿勢が不可欠であることに異論をはさむ隙間はおそらくなからう。「塵ほどもない智で、仏の救いをわからうなどと思ひ上がるな」との声も聞こえてきそうであるが、同時に、

学ぶべし、学ぶべし。

と、声なき声で叱咤されているように、小生には思われてならない。「学問すべからず」の境地に至るまでには、ついぞ極められずとしても。

(小村 正孝)



FORUM  
浄土の広場

「浄土の広場」では  
読者の自由な参加をお待ちしています。  
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、  
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。  
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。  
どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会

## ●枇杷の花

〈特選〉

老犬のわずらうまなこ枇杷の花

植田規夫

●飼われて長く、年老いた上に目を病んでではもう外を歩きまわることもないのだろう。庭先にうずくまる日がずっと続く。枇杷は花をつけて、厳しい冬に入ったことを告げている。大好きの人には殊に共感を得る句だろう。

〈佳作〉

一日を無言に過ぎぬ枇杷の花

長谷川裕

病院のスリッパの音枇杷の花

矢島勇樹

産院に一人で待つや枇杷の花

斉藤辰典

## ●枯野

〈特選〉

東京枯野熱き紅茶をいれている

井口吾郎

●高層ビル群を墓地に例えることはよくある。東京砂漠というのもある。この句は枯野に擬している。殺伐とした建物に囲まれた生活の

## 増田河郎子・選

〈特選〉

## 里帰り毛布は母の匂いして

島神涼子

## ●毛布

ひととき、せめて熱い紅茶で、心のうるおいを得ようとしているのである。

〈佳作〉スケッチの手を休めいる大枯野

瀬川浩子

亡き父の墓遙かなり大枯野

安西麻衣子

看板の指をさしゐる大枯野

立花恵子

●久しぶりの里帰りである。前もって知らせであるから、夜具は日に干してくれてある。毛布にあごを埋めると、母に抱かれて寝た頃の記憶が、ふつとよみがえってくる。なかなか眠れるものではない。

〈佳作〉窓越しの風ひんやりと膝毛布

大村和代

毛布一枚ふわりと垂らし家を出る

植田規夫

海の駅毛布にくるむ捨て仔犬

遠藤 久

●枇杷の花

枇杷の花山門不幸の札立てり  
枇杷の花好みし母の忌日かな  
ふるさとに素逝の句碑や枇杷の花  
産すなを被ひてありぬ枇杷の花  
北限の潮風入れて枇杷の花  
枇杷の花孫の帰省を待ちてをり  
廃業と決めし老医師枇杷の花  
ひさびさの一人歩きや枇杷の花  
枇杷の花婚期を過ぎし娘の笑顔  
枇杷咲いて衣吹かるる修道僧  
枇杷の花清白の詩碑しづもりて  
ぬか床を手で捏ねくりし枇杷の花  
巫女の振る鈴にも似たる枇杷の花  
郵便夫配る封書や枇杷の花

●枯野

はや枯野黄金数つむ弥陀ヶ原  
枯野より枯野に続く道一つ  
良寛のごと子と遊ぶ枯野かな  
枯野原売地の立札朽ち傾ぐ  
茜さす枯野翔び立つ群雀  
不況風出口の見えぬ枯野原  
枯野道と讃の声の消えゆけり  
風向きの自在にあるなり枯野かな  
枯野ゆく妻りハビリの車椅子  
点呼とる羅漢五百や枯野原  
枯野から枯野に入りて枯野へと

細田初枝

吉田ゆきゑ

吉田ゆきゑ

佐藤雅子

佐藤雅子

上野卓誠

きりぶち輝

大貫伸子

石原 新

井村善也

井村善也

井村晃美

瀬川浩子

増田信子

生田正昭

吉田ゆきゑ

吉田ゆきゑ

細田初枝

中島一子

佐藤雅子

佐藤雅子

佐藤雅子

上野卓誠

きりぶち輝

植田規夫

枯野から枯野へと歩みけり  
尋ね人の時間がどこまでも枯野  
大まかに人包まれて枯野かな  
息ひとつ待人来らず枯野かな  
湯布院の枯野の原に牛のたふ  
処方せん紙のころがる枯野かな  
かさこそと枯野ゆく旅過路仏  
枯野来て極楽浄土僧が説く  
枯野吹く風颯々と鴉二羽  
枯野きて母の湯あみの品足しぬ

●毛布

初孫を毛布に抱きて退院す  
寝蓐なき母に毛布を重ねけり  
花柄の樂しき膝のかけ毛布  
赤ケツト坊ちゃんマドンナ白日夢  
羊水のぬくもりのごと毛布中  
双ツ子の毛布干されり午下が  
マンションに毛布干されし片田舎  
妻寒気夜来の眠気に毛布出し  
犬小屋の毛布くわえて日なたぼこ  
毛布着て旅愁をつつむ寝台車  
毛布すべらか駱駝に乗ってきたるべし  
遠出の日膝の毛布の赤さかな  
一枚の毛布に眠る前うしろ  
転勤の夜行の窓辺や薄毛布  
受診待つ膝に毛布の車椅子  
病み人に毛布一枚そつと掛け

植田規夫

長谷川裕

井口 葉

大貫伸子

山口信子

井村善也

井村善也

石原 新

大村和代

増田信子

細田初枝

吉田ゆきゑ

吉田ゆきゑ

中島一子

佐藤雅子

佐藤雅子

佐藤雅子

上野卓誠

上野卓誠

きりぶち輝

長谷川裕

大貫伸子

石原 新

井村善也

井村善也

井村善也

山口信子

山口信子

第四回浄土誌上句会のお知らせ

季題

去年<sup>こぞ</sup>今年<sup>ことし</sup>

寒紅

自由題

×切・十二月二十日

発表・『浄土』二月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

●いずれの題とも何句出しても可

●特選各1名・佳作各3名

応募方法

葉書に俳句(何句でも可)を書き、住所、氏名を必ず忘れないで下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

# 本会理事長

# 佐藤行信師

# 急逝

去る十月二十七日、本会理事長であり、また鎌倉大仏殿副住職佐藤行信師が、享年六十七歳にて正念往生なされました。

師は、実父であられる密雄師と共に、本会の発展のために物心両面において絶大なお力を捧げて頂いた、本会にとりましてなくてはならない先生でございました。

また師は本誌（九十五年十一月号）でもお書き頂いておりますように、卓球に寄せる情熱は大変なものがあり、日本卓球協会の副会長をされていらつしやいました。大正大学助教として学究生活を送られながら、さまざまな宗の要職にもおつきになり、お忙しすぎる生活の中でのこの度の突然のご逝去、心からご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

（一）法名

清蓮社正僧正浄養上人転阿法輪行信大和尚



表葬儀 弔辞

## 〈佐藤行信先生履歴〉

|          |                  |
|----------|------------------|
| 昭和6年2月5日 | 生まれ              |
| 昭和29年    | 大正大学修士過程入学       |
| 昭和31年    | 大正大学修士過程卒業       |
| 昭和38年4月  | 大正大学講師           |
| 昭和45年4月  | 大正大学助教           |
| 昭和48年    | 大正大学卓球部部長        |
| 昭和58年7月  | 埼玉工業大学理事         |
| 昭和60年3月  | 日本卓球連盟常務理事       |
|          | 日本学生卓球連盟副会長      |
|          | 関東学生卓球連盟会長       |
| 平成元年     | 浄土宗総合研究所事務長      |
| 平成4年4月   | 埼玉工業大学常務理事       |
| 平成5年4月   | 法然上人鑽仰会理事長       |
| 平成6年     | 浄土宗総合研究所運営委員会委員長 |
| 平成6年10月  | 神奈川県卓球連盟会長       |
| 平成7年     | 日本卓球連盟副会長        |

浄土宗総務総長 成田 有恒

謹んで神奈川県鎌倉組高德院副住職佐藤行信上人の牌前に弔意を捧げます。

上人は昭和二十八年十一月に大本山増上寺にて宗脈戒脈を相承され、以来半世紀ほどの歳月に亘り寺門の興隆は申すまでもなく浄土宗の発展念仏教化の拡張に尽力されました。すなわち宗内においては、教学院研究所主事、同書記、財団法人浄土宗養学会評議員等を歴任され、特に浄土宗総合研究所においては、その設立当初より事務長、のちには運営委員会委員長として、一宗のシンクタンクとしての研究所の発展興隆に寄与されておりました。御功績は洵に甚大であります。さらに大正大学講師、助教授、部長、局長をも歴任され、学生の育成指導はもとより、大学の運営にも大いに尽力をいたしておりました。上人には蓮門の重鎮としてその御指導御叱声に期するところ大なるものがありましたが、二翌の冒すところとなり道俗の折念空しく去る十月二十七日自界の化縁にわかに尽き安祥として往生の素懷を遂げられました。

## 佐藤行信先生を忍んで

私が重村日専務理事と、鎌倉の静養先に先生をお見舞いしたのは、10月19日の午後であった。その時奥様が「毎日大会の予定表ばかり気にしているんですよ」と、そっと教えてくださった。責任感が強く真つ直ぐな性格の先生は、長い間陣頭指揮をとって準備をしてきた。かながわ ゆめ国体の開幕が、5日後に迫っていることを気になさっておられたのだろう。

「先生、国体は後輩に任せてゆっくり静養してください。」「うん、そうだな、12月の日本選手権には必ず出席するから。これが病気ひとつとされたことがない先生の最後の言葉になろうとは……」。

副会長になられてからこの4年間、先生は会長に代わって東奔西走、大会会長としてあるいは理事会や常務理事会の議長として、立派に会長代行のお役目を果たされた。事務局をあずかる私にとっては、実に頼りになる副会長であつた。

一方、財団法人日本卓球協会副会長の要職を抜きにしても、先生は卓球との縁が切れない

世寿まさに六十有七歳。洵に酸憎の至りであり惜別の情に堪えないところであります。本日本葬の厳儀にあたり上人の聖業を偲び、すみやかに穢國に還来して人天を度し給わんことを回顧し、謹んで浄香一片を牌前に呈し恭しく敬弔の意を表します。

平成十年十一月十五日

財団法人日本卓球協会事務局長 西田 昌宏

い方だった。第2次世界大戦後、低迷を続ける大正大学の卓球部を、全国的なレベルに引き上げたのも先生のお力だった。もともと卓球とは無縁だった先生が、縁あって大正大学の卓球部長を引き受けてからの意気込みは凄まじいものであった。たとえば、シングルの腕前だったゴルフを、ヘビースモーカーだったタバコを、そしてプロ級のマージャン……を、一切断ち切ったのである。一種の「願かけ」にも似た固い決意であった。

また神奈川県卓球協会会長としても各種国際大会や全国大会を開催、地域の強化や普及に大きな刺激を与えられた。神奈川県が、いまや日本の「卓球王国」と言われるまでに充実したのも、先生に負うところが大きい。

部長を務める大正大学以外の学生界もまた、物心両面にわたり先生の恩恵を受けた。日本学生卓球連盟副会長、関東学生卓球連盟会長を長く務められ、学生卓球界の主柱として奮闘された。とにかく面倒見のいい先生で、全国の多くの学生から慕われた。

先生の活動は、ひとり国内に止まらず、中

これは卓球を愛してくださった先生が、病気ひとつされなかつた先生が、なぜ？

まだお若く、これからが本領発揮という時に、なぜ？

先生、なぜそんなに先を急がれたのですか？ かえすがえすも残念でなりません。卓球界から突然、巨人が消えた空虚さを覚えます。

「西田さん、あなたの言うことならなんでも聞くから……」と、私が事務局長に就任した折、声をかけてくださった。私にとって、一生忘れてはならない言葉になってしまった。

佐藤先生のご冥福を念じながら、筆を置かせていただきます。

先生、いろいろとありがとうございました。

# ぱずる

☆まちがいは7ヶ所あります。



まちがいをさがし

答えは41ページにあります。

## 事務局より

### ●年始年末休所のお知らせ

十二月二十六日より一月七日まで事務局を休業とさせていただきます。

一月八日からは平常通り月曜日から金曜日の午前十時より午後四時までとなります。

好評  
発売中!!

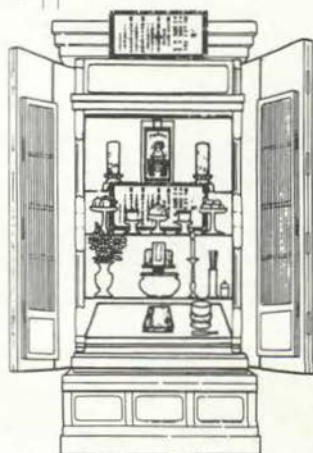
お寺から檀信徒へ

# 宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。  
菩提寺とその宗旨がいつも  
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。

堂内用、境内地用等、寺院仕様もございます。



寺院名が入ります。(版代別)



定価：大 (32.0×18.3cm) 735円／小 (27.3×14.2cm) 420円

注文・問合せは  
**法然上人鑽仰会**

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



祈ゆる日々いつまで続く夜半かな

岱潤

本年七月号から六回の連載をいただいた高木悦男先生の『身障者に学ぶ』も、今回で完結した。四肢欠損児という乙武洋匡君と関われた誰もが、彼によって大きく心が育てられた事を感じ動をもってお書き頂いた連載だった。

その乙武君自身がこの秋講談社から本を出版した。『五体不満足』という本である。

「普通の親は五体だけ満足ならばと願うが、私はその五体のうち四体までもない状態で生まれてきた。しかし今充実した毎日を送っている」と言い、ヘレンケラーの言葉を引いて「障害は不便です。でも不幸ではありません」と結んでいる。そして「人間は誰でも役目を持って生まれてきている。私はこうした身体であったことで、その役目に早く気がつくことができた」とまで言っている。

今年十二月、世界人権宣言が国連総会で採択されてから五十周年という記念すべき日にあたる。しかし五十年たった今日においても、差別と人権侵害は一向になくなるきざしを見せない。世界はもとより日本でも、被差別部落、在日外国人、アイヌ民族、障害者、女性、子供、沖縄出身者などに対する差別事件が多発し、深刻な状態にある。差別などないといふ多くの人が声高に叫ぶ東京でも、この一、二年部落解放同盟員への脅迫手紙事件が相次いで起きている。

乙武君は心のバリアフリーこそ大事なことでと力説する。身体的違い、国籍、出身地など、人間をはかるものさしになるはずがないことを、今一度言い続けなければならない。

(岱潤)

編集チーフ  
編集スタッフ

長谷川岱潤

齋藤晃道

村田洋一

井原法正

佐山哲郎

間川彰道

編集顧問

大室了晴

浄土

六十四巻十二月号 頒価六百円  
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十年十二月二十五日  
発行——平成十年十二月一日

発行人——真野龍海

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 シー・ティー・イー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所——法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七  
FAX〇三(三五七八)七〇三六  
振替〇〇一八〇八八二一八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



民家近し、静かに



足元注意



踏切あり



路旁口



落 下



安心と安全をお届けするのは、  
このマークです。



さわるな



おれ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安 心 と 安 全 を お 届 け す る



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

ご注文・お問い合わせは  
法然上人鑽仰会まで  
電話:03-3578-6947  
FAX:03-3578-7036(24時間)

※詳しくは本誌69ページをご覧ください。

お仏壇用  
宗旨布教額も大好評  
発売中

大(320×183mm) 7 3 5 円より



小(273×142mm) 4 2 0 円より



遂に  
完成

選擇集がよく解るお絵解き  
選擇集十六章之図

布教用グッズとして  
念仏の教えを語るのに  
最勝の選択

本堂・客殿に最適 豪華額装入り  
(585×465mm)

頒価20,000円(税・送料別)

解説書付き

※お届けまでに四週間ほど  
かかる場合がございます。